

金石範文学における「におい」

呉恩英*

(e-mail: decency5@hanmail.net)

目次

- 1 はじめに
 - 2 差別のにおい
 - 2-1 「かずきめ」におけるにおい
 - 2-2 「祭司なき祭り」におけるにおい
 - 3 女性のにおい
 - 4 焦げるにおい
 - 5 おわり
-

1 はじめに

在日朝鮮人文学は、「日本文学」と異なるジャンルだと言われている。小田実
は、外部ではなく、内部で「日本語を使いながら、日本の中に一つの異質の集団
として存在しているものをはっきり出した文体をつくったのは、在日朝鮮人が最
初だ」として、その作品に惹かれるのは、「文体の力」（「(対談) 文学者と祖
国」）だ¹⁾と述べた。それは、日本人読者にとって異質と感じられるほど、在日
朝鮮人文学は、マイノリティーである朝鮮人の存在感をアピールし普遍化するこ
とを志し、朝鮮（韓国）と関わる文化、歴史、政治などを積極的に作品に取り入
れていたからだと思われる。

このような現象は、一世、二世世代作家の作品に強く表われているが、その中

* 名城大学 非常勤講師

¹⁾ 李恢成・小田実(対談) (1972年5月号) 「文学者と祖国」 『群像』講談社、200頁

でも金石範^{キムソクボム}（1925年～）は「朝鮮的なもの」を強調し、実際、他の在日朝鮮人作家より多く取り入れようとしている。彼は、日本語で朝鮮的なものを表現できなかったら、日本語で書くのをやめるつもり（『ことばの呪縛』）だと言明するほど、「朝鮮的なもの」²⁾にこだわっている。

また在日朝鮮人文学において見逃すことができないのは、「朝鮮的なもの」とともに身体的な感覚の表現が多いことである。身体は日本に居り、心は朝鮮にあるという思いがそのような表現を生み出すのである。それは、身体に染み込んだ日本と朝鮮を分離せんばかりの、まるで両国との間で身悶えている文体であるとも言える。

この身体的感覚の表現において、とりわけ「におい」は在日朝鮮人にとっては敏感な問題であり、その点は在日朝鮮人文学にもうかがえる。中でも金石範の作品には「におい」が頻繁に用いられている。本稿では、金石範の作品を中心に、「におい」がどのように扱われているか、どのような意味合いが含まれているかに焦点をあて、考察してみたい。

2 差別のにおい

在日朝鮮人文学における「におい」の表現は、ニンニク、キムチのにおいと言えるが、これは差別的として用いられることが多い。梁石日は、日本人が、「朝鮮人の食生活では唐辛子やニンニクが主要な位置をしめているので、これらを見ると、朝鮮人と結びつけて毛嫌いしたり、そのカテゴリーで漠然と朝鮮人を理解しようとする」³⁾という。日本と朝鮮の食べ物が異なることから、「朝鮮人」＝「ニンニクのにおい」という先入見や偏見が存在するのが分かる。

ところが、金石範の作品には、差別的になる食べ物のおいにはあまり描かれていない。しかし、小野悌次郎が述べているように、金石範の作品の「リアルな抽出や比喻には、ごつい固さ、生理感を刺激する」⁴⁾表現が多く扱われているが、そのリアルな表現の一つが「におい」に関する描写である。では、金石範の作品の中で「におい」はどのように描かれ、何を表そうとしているのだろうか。

まず女性作家李良枝の作品「かずきめ」を見てみたい。在日朝鮮人文学の中で、男性作家と女性作家とを分けて「におい」の表現を比較分析することは、一概に妥当であるとは言えない。だが、ここで李良枝の作品を取り上げるのは、李

2) 「朝鮮的なもの」については次回に論じる予定である。

3) 梁石日（2000年12月）「〈初期詩論〉方法以前の叙情——許南麒の作品について」『ユリイカ』青土社、55頁

4) 小野悌次郎（1998年）『存在の原基 金石範文学』新幹社、41頁

良枝⁵⁾の作品、なかでも「かずきめ」は、日本人の朝鮮人に対する差別の認識や身体的感覚の表現が金石範の作品と似通っている。この視点から、女性作家の作品の登場人物が「におい」をどのように感じとっているかを検討したうえで、金石範の作品における「におい」について考察してみたい。これは金石範文学、ひいては在日朝鮮人文学の研究において重要なプロセスの一つであり、彼の作品の特徴や「におい」に内包している意味合いがより明確になるとと思われる。

2-1 「かずきめ」におけるにおい

李良枝の作品には、食べ物というより身体から漂う「におい」⁶⁾や「声」などの身体的感覚の表現が多く扱われている。その中でも「かずきめ」（1983年作）には「におい」によって登場人物の内面がゆがんで表われている。この作品について高井有一は、「この小説で一番すぐれているのは、やっぱり身体感覚が実に鋭敏にでていることね。自分の考えていることが、観念ではなくて、すぐ身体の痛みになり、あるいは失神したり、そういうことが感覚的に鋭く書けている」と述べ、菅野昭正は「苦しさ、辛さが、心の問題だけでなく身体感覚と結びついていることが、この小説の評価すべき特徴だと思います」⁷⁾と評している。このように李良枝の作品には、精神的、身体的に傷つけられたことを身体感覚の表現を通して表現しているところが際立っている⁸⁾。すなわち、登場人物が抱えている問題が身体的感覚の表現に結びつけられている。

「かずきめ」の「彼女」の母は、サイシュウトウ出身の朝鮮人と離婚し、息子二人と娘一人がいる日本人と再婚する。前の夫も今の夫も母に暴力を振るう人間である。「彼女」は小学生の頃、社会科の教科書に朝鮮について書かれている箇所が出ると、教室の皆の注目が自分に集まるのではないかと、自分が朝鮮人だということを知られるのではないかといつも不安に思っていた。そして少し成長した「彼女」は、腹違いの二人の兄たちに犯され妊娠する。しかし、兄の敏彦は、自分の罪が親に知られないように「彼女」を脅すのである。

だが、「彼女」は、兄敏彦の脅迫より、その体臭に耐え切れなかった。その

-
- 5) 二人の年齢は少し離れているが、二世、すなわち、日本で生まれ育ったことで朝鮮への憧れをもち、そして朝鮮（韓国）へ行ったことがある。
- 6) 李良枝の「由熙」（1988年）や鷺沢萌の「君はこの国を好きか」（1997年）には、韓国と日本の「におい」の違いが描かれている。その「におい」が、彼女らが感じたいと思っていた祖国が実際には存在せず、それに幻滅し離れようとする契機となっているのである。
- 7) 菅野昭正、高井有一、大橋健三郎（1983年5月号）「創作合評—89—増田みず子「内気名夜景」、李良枝「かずきめ」、山川健一『鋼のように、ガラスのように』』『群像』講談社、278～286頁
- 8) 李良枝の作品についての詳しいことは、拙稿「在日朝鮮人にとっての「異文化」とその身体感覚—李良枝の作品を通して—」（『在日同胞文学とディアスポラ3』JNC、2008年、219～241頁）を参照。

「におい」は、忌まわしい記憶を甦らせるものであったからである。「彼女」はその「におい」によって支配され、自分が犯されたこと、妊娠したことを誰にも打ち明けることができない。そして唯一の理解者であるはずの母にも話せない。母は、再婚した日本人の家で居場所を失わないように必死に「働き蜂」となり「家政婦」のように働きながら、そのことに幸福さえも感じていると「彼女」は考える。いつも和服を着ている母は、この家に入る時からすでに日本人のように過ごしている。

その義母を認めることができない義兄・敏行は、父が朝鮮人と再婚したことに納得できず、「なんでそんなに朝鮮人の肩をもつんだよ……オヤジ、……オフクロが死ぬのを待ってたみたいに、こんな親子を連れて来て……臭いんだよ。」⁹⁾と、その不満を口にする。敏行の不満は、継母と腹違いの妹が朝鮮人だということ、そしてそれを「臭い」という言葉を通して不満を発するのである。すなわち、継母と「彼女」を家族として認めず、異民族として見なしていることが分かる。

このような状況の中で、頼りの母が子宮癌にかかったことによって「彼女」の不安はエスカレートする。子宮癌にかかった母の子宮からの匂いは、汚れた自分の子宮からもそのような「におい」がするのではないかと「彼女」を脅えさせるものであった。

性器から悪臭を放ち始めた母は、すでに手遅れの状態で病院に運びこまれた。

(中略) 病室の臭いが嫌でならなかった。だが彼女は母の最期を見届けなくては、と歯を食い縛り、悪臭に耐えていた。(『李良枝全集』、91頁)

「彼女」は妊娠した時から医者が怖くなった。特に産婦人科は、「子宮をとり、朝鮮人が殖えないように」するという不安が妄想まで発展しているのである。だが、そのような不安があるにもかかわらず、「彼女」は、二十歳の時、成人式のつもりで子宮と卵巣を取ろうとした。「彼女」の妄想は、植民地期に日本が朝鮮人の民族性を抹殺しようとした歴史的な記憶と「彼女」自身が経験したレイプが重なった衝撃からエスカレートしたのである。そして「彼女」は、「ぷんぷんする自分の中の人間の臭い」¹⁰⁾を洗い落とそうとする。

李良枝の「かずきめ」に表われている「におい」は、主人公自身の苦痛をより高めるものとして働いている。「におい」は、汚れや病気、差別や蔑視あるいは劣等感や優越感とも結びついている。ある地点に境界線を引き、その両側で異質感を増幅させる「におい」が、この作品では暴力性を孕んだものとして描かれて

9) 李良枝 (1996年) 『李良枝全集』講談社、85頁

10) 前掲書、94頁

いる。これは日本（植民地化された）や男性に支配された被害者意識が自分の身体を追いつめるところで感覚化されたものだと言えよう。

2-2 「祭司なき祭り」におけるにおい

金石範の作品における「におい」は、李良枝の作品とは異なる暴力性を孕んでいると言えよう。李良枝の作品は、主人公が抱えている悩みを身体化した比喩的表現が金石範の作品と似通っているが、その「におい」に関する描き方には大きな相違がある。金石範の作品の場合は、他者、主に女性の「におい」によって、登場人物が主体を確立しようとするのである。

また金石範の作品では、他の在日朝鮮人作家の作品に比べて朝鮮人が日本人から差別される場面はあまり描かれていない。その代わりに、祭祀の供え物をはじめ、まるで朝鮮の食文化を紹介するように様々な食べ物を登場させる。下記の引用文のように、「におい」は感じさせるというより、済州島と本土との違いなどを説明する形をとっている。

ケージャンのまたの名を、軀にいいということから補身湯とも呼ぶ。もともと夏ばて防止といった趣のある、農夫たちの食べ物に由来するものだろう。島の人間はセッキ膾とは違い、ケージャンはあまり食べない。ところが、最近本土人が、とくに北朝鮮出身の「西北」の連中が島に入り込んでからケージャンがはやりだした。（『火山島Ⅲ』、264頁）

朝鮮人が日本人から差別されたことより、韓国で民族同士の間にも生じた差別、虐殺に焦点が当てられている。彼の代表作と呼ばれる『火山島』には、「実際はにんにくのおいがするのではなく、朝鮮人だから、にんにく臭いということになる」¹¹⁾という記述があるが、「日本人の偏見や蔑視」から逃れたいという苦悩の言葉とは解釈できない。

ところが、「祭司なき祭り」（1981年）¹²⁾は、差別のにおいを扱った唯一の作品とっていいほど「におい」を通して差別を描き出している。この作品には、人情も感じさせない、暗闇の、どん底に落ちた朝鮮人部落のにおいが描かれている。「祭司なき祭り」は、日本の中の朝鮮人部落の不条理を浮き彫りにした作品とも言える。主人公金鋒男が読んでいたカミュの『異邦人』のように、主人公の殺人行為があたかも罪の無い、正当なことのように表現されている。

東京の空を蔽う醜い怪物、東京中に振り撒かれる醜悪なにおい。あらゆる醜悪

11) 『火山島Ⅱ』、89頁

12) この作品は、1958年に起きた「小松川事件」の犯人李珍宇に関することが素材になっている。

なるもの、汚れたるもの、貧しきもの、弱きもの、呪われたるもののかたまり、吹きだまり、パンドラの箱のにおい、混沌、不満、無気力、絶望、爆発、死。（「祭司なき祭り」『金石範作品集Ⅱ』、163頁）

このような町で生まれた金鋒男は、「朝鮮という国籍のレッテル」が貼りつけられ、自由な人間に、幸せな人間になれない。これは朝鮮を知らない人の先入観によって「朝鮮」が虚構化¹³⁾され、その中で身動きがとれない状態とも言えよう。塩見鮮一郎は部落民について、差別者は、その対象が身体的な欠如がないにもかかわらず、差別の根拠を身体上の差異に見出そうとし、その延長上に、「部落民は日本人ではない」という人種起原説がフィクション化され、さらに突き進んで、「人でない」とされ、「人外のもの」と呼ばれ、また「非人」とされた¹⁴⁾という。ちょうどこのように差別される「朝鮮」が現実の中でどんどん膨らんで現実よりさらに現実化し¹⁵⁾、金鋒男に付きまとうのである。

おれの名前は、金沢朋男、^{きんほうなん}金朋男、^{きんほうなん}金鋒男、……彼はいくつかの名前が洗濯泡みたいにぶつぶつ浮き上がって消えるのをおぼえたが、その三文字のもう一つのほうがいわば朝鮮人としての彼の“本名”であった。彼は三文字の姓名が嫌いだった。そしてなかでも「金」の字が厭だった。（「祭司なき祭り」『金石範作品集Ⅱ』、170頁）

金鋒男には、^{カナザワホウナン}金沢鋒男、そして^{カナザワトモオ}金沢朋男など幾つかの名前がある。朝鮮名の金の字には、「動物園の、さかりがついた動物のにおいがしみた“チョーセン獣”」の名札のような、「日本人に嫌われるいやなにおいがしみついている感じ」がするため、「朝鮮」という汚名から脱したいという気持ちで日本名に変えたのである。少年時代から使い始めた日本名は、「自分の軀の発育」と一緒に大きくなった「彼の血肉」であり、彼から「その名前を引き剥がせば皮膚がいっしょにくっついて破れる」¹⁶⁾と思うほど、名前が身体の一部になっている。

この作品の主人公金鋒男は、他の作品とは違って、すべての悪い物事が凝集する朝鮮（人部落）を拒否し、日本に距離を置こうとするより、日本にくっきたがっていることが分かる。金鋒男は、この朝鮮人の「におい」がしない日本名に執着し、自分が「醜悪なものの化身の珍獣」、「朝鮮人」である事実が現実ではなく、夢であってほしいと思うくらい朝鮮に対して拒否感をもっているのである。

13) 中藪英助（1970年9月号）「朝鮮人の虚像と実像」『新日本文学』新日本文学会、41頁

14) 塩見鮮一郎（1982年）『言語と差別』せきた書房、78頁

15) 梁石日（1990年）『アジア的身体』、293頁

16) 金石範（2005年）「祭司なき祭り」『金石範作品集Ⅱ』、170～171頁

にきびに似たクリーム色の細い線状の脂が、鏡のなかの小鼻の毛穴からしぼり出されて、(中略)それはかなり性的なおいなのだ。(中略)これが醜悪なるもの、貧しきもの、呪われたものの顔だ。どうだ、におうか、賤しきものにおいが。チョーセンジンという人間がにおうか。(「祭司なき祭り」『金石範作品集Ⅱ』、247頁)

彼にとって「朝鮮のにおい」は次第に憎悪の対象となり、自虐的な思いをさせるものに膨れ上がる。そして暗闇の朝鮮人部落から離れたいと必死にもがいている。この朝鮮人部落で生まれ育った主人公金鋒男にとって、大声(喧騒)よりもにおい(悪臭)が、その暗黒世界を特徴づける。朝鮮の悪臭が身体に沁み込み、その身体から発する「性的なおい」には、何度か夢で見た殺人を現実化させる暗示が潜んでいる。だが、夢を実現しようとするといっても、殺人事件を引き起こさせる動機は明確には描かれていない。つまりここでの「性的なおい」は、主人公が押しのけようとする「朝鮮のにおい」を否定なく自覚させ、それが現実の殺人を引き起こさせるという不条理へと導くのである。

3 女性のにおい

「祭司なき祭り」には、朝鮮人部落で漂う差別される者のにおいが表われているが、そのにおいは主人公金鋒男の身体に染み込み、男性の「性的なおい」、すなわち「朝鮮のにおい」が「朝鮮人」を感じさせるものとして表われている。だが、他の作品の「におい」は、ほとんど男性が女性から漂うにおいに執着するという形で描写される。「看守朴書房」(1957年)、「観徳亭」(1962年)、『万徳幽霊奇譚』(1970年)では、「女のにおい」は、そのにおいに男が惹かれる様子が見られる。「看守朴書房」(1957年)は、1948年夏ごろ済州島のある監房を見張る看守朴書房(元召使)についての物語である。この作品には、「監房いっぱい雑魚寝の女囚たちで体臭がむせかえっている」¹⁷⁾ことや「看守は牡犬のように女監房のにおいを嗅ぎたかったのだ」¹⁸⁾という描写がある。済州島の女のにおいは海のおいのように雑魚に喩えられ、男の本能が追い求めるものになっている。「英雄は色を好むと聞いたが、さてはおれも英雄と「縁」があるかな」¹⁹⁾と思う「看守朴書房」のように、金石範の作品では皮肉なヒロイズムを表わす場面において、「女のにおい」が重要な意味をもつ。『火山島』²⁰⁾にも同様

17) 金石範「看守朴書房」『金石範作品集Ⅰ』平凡社、2005年、7頁

18) 前掲書、10頁

19) 前掲書、8頁

の場面が現われる。中村福治によれば、『火山島』には様々な女性が登場し、彼女たちに「新しい女性像を提示」していると指摘するが、李芳根は彼女たちを「政治的議論をたたかわす」「対等の人格として」ではなく、「性的関心の対象に収斂している」²¹⁾だけではないだろうか。特に、李方根の家の召使であるブオギには特別な感情を持っている。彼が彼女に惹かれ執着するのは彼女の身体から漂うにおい²²⁾である。

ブオギが大きな軀をゆっくり揺るようにして縁側を歩いてきた。におい、におい……、ブオギのにおい。におい袋みたいに肉体の底にいく層ものぶ厚い体臭を詰めた田舎女。でんぼう爺いと同じように「美」に遠く「醜」に近い、それで「醜」ではない女、女体。裸になった全身の毛穴を開いていっせいににおいを、昼間とは違う夜にだけにおうようなにおいを出す……。 (『火山島Ⅱ』、294頁)

ブオギの「鯛を腐らせてつくった塩辛のえもいえぬにおい」(『火山島Ⅱ』、332頁)、その肉体から「かすかな不安と戦慄を呼び起こすにおい」(『火山島Ⅱ』、295頁)は、「一つの女体を越えて抽象的な自然のひろがり」²³⁾をイメージさせる。彼女が召使であり、愛情のない肉体関係であるにもかかわらず、李芳根は彼女のにおいにこだわっている。李芳根の妄想の中で何とも名状し難い「におい」を通して彼女を観念的な存在として捉えようとしているのである。このように彼が彼女を思うのは、金鶴童が述べたように、彼女が後で4・3事件に参加する存在である²⁴⁾からである。それを察する(嗅ぎつける)のは李芳根だけであるが、彼が彼女と肉体関係を持つことによって、事件と深く関わるようになることを暗示しているのである。

“自分が生まれる以前の出来事だけれど、四・三はあった”という彼女の肉

20) 1976年から1983年まで「海嘯」というタイトルで『文学界』に連載し、これを1983年に『火山島』と改題し、第一部(全三巻)として文芸春秋から刊行された。その後、1986年から1994年まで再び『文学界』に連載され、1996年に第二部(全四巻)が文芸春秋から刊行された。

21) 中村福治(2001年)『金石範と「火山島」』同時代社、234～235頁。

中村福治は、李芳根と女性たちとの関係を恋愛・結婚観として語っている。

22) 磯貝治良は、『火山島』に現われる「においのメタファー」を列举し、「即物的な知覚の表現と、知覚と想像の婚姻による喩的表現」は「単一ではなく重層的な文体構成によって描写される」ものだと述べている。(『〈在日〉文学論』新幹社、2004年、169頁)

23) 主人公が女の身体を通して「朝鮮」を感じようとするのは、金石範の作品の特徴の一つとも言える。

「女を抱いたままひそかに落涙し、女の肉体の中のひろがり朝鮮の大地の乳脈のにおいを嗅いだ感傷を思い起す」(『幽冥の肖像』『金石範作品集Ⅱ』平凡社、2005年、334頁)

24) 金鶴童(2009年)『在日朝鮮人文学と民族』国学資料院(韓国)、235頁

体がかもすその肉声で、四・三事件の最後の惨憺の象徴の父のことを知りた
い。その温かい息吹きに包まれた肉声が、ゲリラの存在を、四・三の存在をお
れのなかへ伝えてくれるだろう。冷たい、あるいは熱い液体のように体内の忘
却のなかを流れて。（「満月」『金石範作品集Ⅱ』、536頁）

「満月」（2001年）には、日本に居ながらもなんとか事件と関わろうとする主
人公の姿勢が他の作品より強く現われている。「満月」のムン・ソンギュは、赤
ん坊の時、母が銃殺されたので、彼には事件の記憶がなかった。そのため、彼は
4・3事件が実際に起きたことだと信じようとしな。しかし、その事件が起きて
から50年がすぎた今、クラブの「ニューカマー」のヨンファから4・3事件の話
を聞き、それを実際にあったものとして受け入れようとする。だが、ムン・ソ
ンギュが信じようとしたのは、最後の山部隊であった彼女の父が、7年服役後に帰
郷し現実に生きていたというところである。その事件の「現実感を逃さずに一挙
に自分のなかで合体、実体化」するには、「大逆罪人の遺家族であるヨンファの
息吹く肉声の疼きの通路が必要」²⁵⁾だった。その彼女から事件について聞くまで
を導いてくれたのが、彼女の「におい」なのである。

ムン・ソンギュはヨンファの身体のおいを吸いこむという行動によって事件
の実体を実感しようとし、彼女の「におい」を自分のうちにとり込んでいる。つ
まり、彼の記憶にない事件をヨンファを通して山部隊の魂を感じ、その事件の実
感を自分のものとして満たそうとするのである。またヨンファを「母」の懐のよ
うに感じる、まるでオイディプスのような場面²⁶⁾もある。この「女のおい」を
嗅ぐというムン・ソンギュの行為は、愛情が込められているというより、自分の
記憶にない事件の現実性をより高めようとするためのものなのである。

このように金石範の作品において女性の「におい」は、性的な対象そのものと
化しており、それを通して主人公の自分の理想や済州島、そして4・3事件へと関
連づけるための役割を果たしていると言えよう。

4 焦げるにおい

「夜」（1971年）や「驟雨」（1975年）では、火葬場の「におい」を通して4・3
事件を連想させている。「夜」の原型とされる「혼백（魂魄）」（1962年）で

²⁵⁾ 金石範（2005年）「満月」『金石範作品集Ⅱ』平凡社、545頁

²⁶⁾ 「夢で子宮なる母を実感し、女体の下門から子宮へ到達しようとしていたのか。夢の余韻の
深い懐しさの感情が母を姦した意識をはるかにしのぎ」（「満月」『金石範作品集Ⅱ』、
549頁）

は、通りから漂ってくる屋台のヤキトリのにおいに自分も昔、屋台をやっていたことを思い出す、という場面で終るが、「夜」では、ヤキトリ屋からのにおいに火葬場の「におい」を思い出し、火葬場で死者の「息吹きを見て、そこに生臭いにおい」を嗅ぎ、それらの記述を朝鮮、濟州島の女である亡くなった母の「におい」へと繋げている。日本語で書かれた「夜」は朝鮮語で書かれた「혼백(魂魄)」よりも朝鮮(語)を意識しており、4・3事件に結びつけて、「におい」を通して朝鮮的なものを描こうとした²⁷⁾ことがうかがえる。

この焦げる「におい」は、「乳房のない女」(1981年)に描かれているように、犠牲者、特に女性が拷問を受ける場面をも想起させ、濟州島民、特に女性たちの犠牲を浮き彫りにし、朝鮮、濟州島、そして事件へと関連をより深めている。上述した抽象的な「におい」が濟州島の女のにおいだとすれば、これから論じるのは、拷問の焦げる「におい」である。これは「記憶をもたらす役割」を果たすものである。

「遺された記憶」(1975年)は、その記憶をもたらす強烈なにおいに包まれている。「遺された記憶」の宋東丘は、病院で妻の遠縁である徐秋遠と出会うことによって、濟州島のことを思い出す。

審査室にはにおいがあった。屠殺場のにおい、そして奇妙な、人間を愚弄するような香水のにおい、いちど嗅げば忘れられない奇妙な、香水のにおいだ。生臭いにおいはいまは床板や壁、拷問道具などにしみこんでいる以上に、抽象的なにおいを発する。血の一滴はここでは十滴のにおいを出す。なかば腐ったまま乾き切ったにおい、死臭というより、生きたまま瞬間に死んだにおい。乾き切っていてなお生臭いにおいの底に、私は人間を狂気に駆り立てるある力を感じた。(「遺された記憶」『遺された記憶』、106頁)

「私」が「審査室」で拷問に耐え切れない状態に陥った際、妻が捕らえられてきて、取調官が妻の陰毛に火をつけるのを目撃させられる。夫は、その時嗅いだ強烈なにおいを自分の身体に刻み付ける。そして動乱から逃れ、日本に渡って十数年が経った現在もなおそれを忘れることができない。彼は、顔を洗ってから「私」を誘うにおいを感じ、妻の部屋に足を運んでちりかごに捨てられた髪を燃やしてかつてのにおいを確かめる。その毛や肉の焦げるにおいは夢の中でも押し寄せてくる。拷問のトラウマを焦げるにおいを通して鮮やかに思い出すのである。「におい」の記憶は忘却されにくい²⁸⁾というが、彼は繰り返し確認して感覚

²⁷⁾ これは、『火山島』を見ても分かるようにハングルで書かれた「화산도(火山島)」(문학예술『文学芸術』、1965~1967年)より『火山島』の方が朝鮮的なものがより明瞭に表われている。

的にも拷問の「におい」（記憶）を忘れないようにしている。

私は何かのにおいを嗅いでいた。あの忌わしい夢から急に醒めたときのように、鼻先に毛の焦げた後のにおいがしていた。（中略）においがしていたのではなく、私はにおいを想像して自分で求めていたのだ（「遺された記憶」『遺された記憶』、106頁）

スティーヴン・カーンは、感情の記憶の中で、味と匂いは、非常に記憶し難いものであるからこそ、感情を甦らせる特別な力を持っているという。「匂いほど深い「情緒的余韻」をもって記憶に働きかける感覚」²⁹⁾はなく、記憶を呼び起こす力がある。金石範の作品には、「におい」という記憶装置を通して事件を語っているプルースト的現象が多く描かれている。それは朝鮮を思い起こし、事件についての記憶を忘れないようにする装置として使われているともいえるだろう。

この作品でもう一つ注目したいのは、「私」が考える拷問と強姦の関係についてである。「私」が受けた拷問と妻の受けた強姦は対照的に表われている。このような描写は金石範の他の作品にも表現されているが、「遺された記憶」の中の「私」の受けた拷問の場面では、恐怖心を感じさせるにおいが充満する「審査室」の描写によって強調されている。「私」にとって拷問は狂気に駆り立てられるほど耐え切れないことであった。つまり、男性である「私」（主人公）にとって自分が「拷問された」ということが重要なのである。その「拷問」の辛さは「私」にとって誇りとも思われるのである。

その反面、「妻」の強姦については、「拷問された」というより、「どのような拷問されたか」がより詳しく描かれている。「満月」には、「皮膚が剥がれて出血する傷だらけの女体……。」「女は拷問される時、裸で逆さまに吊されるんだ……。」³⁰⁾という描写がある。この性拷問を経験した現存の女たちは、何十年が過ぎようとその事実を絶対に口に³¹⁾できないのに、この話は「必ず男の口を通して」語られるのである。このような残酷極まりない拷問についての描写の対象は主に女性である。女性自身は心的トラウマから語るができないと思われる

28) Davis (1977年) の示すごとく、すべての実験結果がニオイの記憶の優位を示すわけではないが、Engenらの実験結果と日常経験とは、ニオイの記憶が独自性をもつとはいわないまでも特殊な性格をもつ現象である、という多くの作家たちの証言を支持するものである。

(Trygg Engen著・吉田正昭訳(1990年)『匂いの心理学』西村書店、118頁)

29) スティーヴン・カーン(1989年)『肉体の文化史』法政大学出版局、71頁

30) 金石範(2005年)「満月」『金石範作品集Ⅱ』平凡社、501頁

「乳房のない女」には、「後日彼女が一言ってくれたが、胸のない女は刃物ではなく焼きゴテで乳房をえぐり取られていたのだった。」のように女性の拷問についての描写が表われている。(「乳房のない女」『金石範作品集Ⅱ』、前掲書、317頁)

31) 金石範「満月」『金石範作品集Ⅱ』、501頁

が、その女性の心境を男性は理解しようとしていない。むしろその女性の苦痛より、それを男の口から淡々と語る形式をとることによって、あたかも猥談のように語られるのである。

韓国在住の作家玄基榮の「順伊おばさん」（1978年）と「海龍の話」（1979年）にも、女性が性的暴力と国家暴力を被る場面があるが、ここでは被害者の苦痛が思いを込めて描かれている。しかし、金石範の「遺された記憶」には、被害者の思いを描くというより、主人公が妻の被った傷（「焦げるにおい」）を通して自分が拷問されたことと自分の妻がレイプされた（妻を守れなかった）という屈辱³²⁾の気持ちが強調されているのである。

「おまえのいうとおり、何もなかったことにしよう……だけどだ、おまえは審査室でな、獣たちに股を開かれて毛を焼かれながら、よくも辛抱をしたものだ。おれが女だったら恥ずかしくて死んだかも知れん……」（「遺された記憶」『遺された記憶』、129頁）

「……あなたは……あの犬畜生たちに拷問までされた人が、なんでそんなことをいってあたしを苦しめるんです？」

「苦しめる？……拷問とは関係がないだろ」

「あたしは、あなたの代りに拷問を受けたかった……私は死んでしまいたい」（「遺された記憶」『遺された記憶』、130頁）

「私」は、さらに妻が自分に話さなかったこと³³⁾に苛立ち、「妻への不信を伴った自分のどうにもならぬ想像に苦しむ。そして「私」は自分の問いに答えず背をむけた妻を「まさに濟州島の女」だと思ふのである。この「私」の妻のように金石範の作品において強い女性のイメージは濟州島の女性を示している描写

32) ケイト・ミレットは、「人類学や、宗教的、文学的神話が明らかにする証拠はどれも、父権制が女についていく確信が政治的に都合のよいものであることを証明している」という。その父権制をギリシャの例をあげて、性の政治について語っている。「満月」において「私」の妻に対する「性」に語る際、ケイト・ミレットのこぼしを借りれば、妻の性は「不潔で罪深く、体力を弱らせるものとされ」、「私」は「男の存在証明は性的というよりむしろ人間的^{アイデンティティ}存在証明として保持される」ものとして表われていると言えよう。（『性の政治学』ドメス出版、1985年、105～117頁）

33) 強姦の被害者が自分の経験について沈黙するのは、女性の純潔と貞操に対する家父長制イデオロギーのためである。女性の貞操と母性は共同体的アイデンティティのトリデであり、女性の身体は家族や町の共同体と同様な家父長制「社会の身体」に帰属するため、女性の羞恥と母性の破壊は共同体全体の羞恥であり、喪失を意味する。（キム・ソンレ（2001年号）「国家暴力と性政治学—濟州4・3虐殺を中心に」『痕跡』（韓国）、285頁）

が多い。これは母系の紐帯が強く、陸地ほどには濟州島の女性の地位は低くないことから、濟州島の女性は陸地の女性より強いイメージがある³⁴⁾からだと思われる。

このように「遺された記憶」の「私」は、焦げる「におい」を通して「私」の拷問と妻がレイプされたことを結びつけ、一体化して記憶しようとするのが分かる。同時に、その中には、男性優位主義の「私」がレイプされた妻を追及することによって自身の屈辱を克服しようとするかのような意図も窺える。このような男性と女性の優位関係は金石範の作品に頻繁に表われる図式であり、濟州島民の虐殺を語る際には、ほとんど無言で受け身の女が常にその中心になっているのである。

また「遺された記憶」の「私」には御都合主義のような面も見られる。T面の細胞委員会キャップであり、地下活動もしたと思われる徐秋遠と、ゲリラとの繋がりもあるのに参加せず、日本に密航した「私」が対照的に描かれている。

「私」は、党员だったが日本に逃げ、日本に同化していく徐秋遠に対して批判的である。これに対して「私」は、党员ではないのに、後ろめたさを感じながら日本へ逃げ、朝鮮名のまま、朝鮮人の妻をもっている。この事実だけでも、徐秋遠の前に堂々として出ることができると「私」は考える。徐秋遠は党员として責任を果たすべきであるが、「私」の方は党员ではなかったことに安堵感を感じる。このようにその時々都合によって彼の行為は合理化される。

5 おわりに

在日朝鮮人文学には身体的感覚の表現が多く用いられているが、中でも金石範の作品には「におい」の表現が顕著である。また、他の作家の作品における「におい」のほとんどが差別の的として用いられるのに対し、金石範作品では、その意味合いではあまり使われていない。

金石範の作品における身体的感覚の「におい」の表現は、李良枝の作品と似通っている。だが、李良枝の作品では、「彼女」が抱える問題が身体的な表現を通してその苦痛を訴えるのに対し、金石範の作品では、男性が女性の存在を「に

34) 宋連玉 (2005年) 「「在日」女性の戦後史」『歴史のなかの「在日」』藤原書店、134～135頁

金石範は、「私には「弱さ」を含んだ女の「強さ」を書きたい願望がある」と言う。しかし、彼が語る強い女性像とは違って彼の中に「儒教的な男性優位の姿勢」が強く内在しているため、作家が思う女性像と作品に描かれている女性像との間には隔たりを感じざるを得ない。(「これでもフェミニスト願望」『転向と親日派』岩波書店、1993年、247～251頁)

おい」によって感じとる、という構造をとっている。すなわち、金石範の作品における女性の「におい」は、主に主人公の「男性」自身の主体を確立しようとする装置として用いられているのである。

「におい」を通して、主人公（女性）が自身を責めるものとして感じ取る李良枝の作品とは対照的に、金石範の作品には登場人物の男性優位主義あるいは民族意識の持ち主であることを示し、そして相手を責めるものとして働いているのがより著しく表われていると言えよう。

ところが、「遺された記憶」にも見られるように、女性自身の精神的な苦痛はあまり描かれていない。女性を性的に常に受動的な存在に仕立て上げようとし、あたかも〈声〉なき肉体のように表現され、物化され、だからこそ強い「女」として恣意的に観念化されているのである。これは祭祀やシャーマニズムについての描写からも窺えるが、男性主人公の女性への眼差しは、儒教的な考え方に基づく男性の支配的イデオロギー、男性優位主義をベースとして表われるものだと言えよう。

また「におい」の表現は、4・3事件と関わる作品に多く用いられている。主人公は「におい」に執着し、主人公の「朝鮮」に対する思いは、自分自身自らが「朝鮮」を感じて生じるものではなく、主に女性の「におい」を原点として朝鮮に対する思いが込み上がるのである。主人公にとって「におい」は、「朝鮮」を連想させるものとして、また「朝鮮」へと導く衝動の源として重要な役割を果たしている。そして臆病になっている主人公を行動へと駆り立てる牽引力となっているのである。

【参考文献】

(韓国)

- 玄基栄(2006年)『順伊叔母さん』チャンピ
金鶴懂(2009年)『在日朝鮮人文学と民族』国学資料院
金ソンレ(2001年)「国家暴力の性政治学—済州4・3虐殺を中心に」『痕跡』文学科学者
呉恩英(2008年)「在日朝鮮人にとっての「異文化」とその身体感覚—李良枝の作
品を通して—」『在日同胞文学とディアスポラ3』JNC

(日本)

- 李良枝(1996年)『李良枝全集』講談社
金石範(1971年)『万徳幽霊奇譚』筑摩書房
金石範(1986年)『火山島』(I、II、III)文藝春秋
金石範(1996年)『火山島IV』文藝春秋
金石範(1997年)『火山島』(V、VI、VII)文藝春秋
金石範(2005年)『金石範作品集』(I、II)平凡社
金石範(1972年)『ことばの呪縛』筑摩書房
金石範(1993年)『転向と親日派』岩波書店
金石範(1965~1967年)「화산도(火山島)」『문학예술(文学芸術)』
金石範(1962年10月号)「혼백(魂魄)」『문학예술(文学芸術)』
金石範(1977年)「遺された記憶」『遺された記憶』河出書房新社
金石範(2006年)『〈在日〉文学全集 金石範』勉誠出版
鷺沢萌(1997年)『君はこの国を好きか』新潮社
菅野昭正、高井有一、大橋健三郎(1983年5月)「創作合評—89—増田みず子「内気
名夜景」、李良枝「かずきめ」、山川健一『鋼のように、ガラスのよう
に』」『群像』講談社
磯貝治良(2004年)『〈在日〉文学論』新幹社
小野悌次郎(1998年)『存在の原基 金石範文学』新幹社
ケイト・ミレット(1985年)『性の政治学』ドメス出版
塩見鮮一郎(1982年)『言語と差別』せきた書房
スティーヴン・カーン(1989年)『肉体の文化史』法政大学出版局
宋連玉(2005年)「「在日」女性の戦後史」『歴史のなかの「在日」』藤原書店
中藪英助(1970年9月号)「朝鮮人の虚像と実像」『新日本文学』新日本文学会
中村福治(2001年)『金石範と「火山島」』同時代社
梁石日(1990年)『アジアの身体』青峰社
梁石日(2000年12月号)「〈初期詩論〉方法以前の叙情—許南麒の作品について」
『ユリイカ』青土社
Trygg Engen著・吉田正昭訳(1990年)『匂いの心理学』西村書店

要 旨

在日朝鮮人文学は、「朝鮮的なもの」と共に身体的な感覚の表現が多いことから日本文壇で注目されていると思われる。身体的な感覚の表現が多いのは、身体は日本に居り、心は朝鮮にあるという思いがそのような表現を生み出したのである。これは、身体に染み込んだ日本と朝鮮を分離せんばかりの、まるで両国との間で身悶えている文体であるとも言えよう。本稿では、身体的感覚の表現の中でも「におい」が大いに用いられている金石範の作品を中心に考察してみた。

在日朝鮮人文学には身体的感覚の表現が多用されている。特に、李良枝の作品は金石範の作品と似通っているところがあるが、その表現方法は異なる。李良枝の作品では、「彼女」が抱える問題が身体的な表現を通してその苦痛を訴えるのに対し、金石範の作品では、主に女性の「におい」を通して主人公の「男性」自身の主体を確立しようとする意識を表わす装置として表われているのである。すなわち、金石範の作品では男性が女性の存在を「におい」によって感じとる、という構造をとっている。

金石範の作品には女性自身の精神的な苦痛はあまり描かれない。女性を性的に常に受動的な存在に仕立て上げようとし、あたかも〈声〉なき肉体のように表現され、物化され、だからこそ強い「女」として恣意的に観念化されているのである。男性主人公の女性への眼差しは、儒教的な考え方に基づく男性の支配的イデオロギー、男性優位主義をベースとして表われるものだと言えよう。

また金石範の作品の「におい」の表現は、4・3事件と関わるものに多く表されている。主人公は「におい」に執着しているものの、主人公の「朝鮮」に対する思いは、主に女性の「におい」を原点として朝鮮に対する思いが込み上がるのである。主人公にとっての「におい」は、「朝鮮」を連想させるものとして、また「朝鮮」へと導く衝動の源として重要な役割を果たしている。

キーワード：在日朝鮮人、金石範、李良枝、身体的感覚の表現、におい、差別、4・3事件

투 고 : 2012. 11. 30
1차 심사 : 2012. 12. 15
2차 심사 : 2013. 1. 5